

音は語る

文 藤盛一朗

連載 51

ラフマニノフの交響曲第2番を演奏後、
拍手に応えるヴァンスカと東響
© T.Tairadate/TSO

悪に勝る光 ラフマニノフの世界感覚 《千人の交響曲》は人を結ぶ理想うたう

オスモ・ヴァンスカ指揮東京交響楽団のラフマニノフの交響曲第2番（6月13日、サントリーホール）を聴いて、思い浮かんだ風景がある。作曲家の故郷、ロシアのノブゴロド地方。2001年に初めて訪れた時は、春の盛りだった。ヴォルホフ川が流れる美しい河畔に、白亜のソフィア聖堂が建つ。自然の空間の広がり。ほおをなでる優しい風。川面の動き……。そして幼いラフマニノフは、この聖堂や地元の村の教会で聖歌の響きに浸った。音楽体験の原点と言われる。

ヴァンスカ指揮東響 際立たせた「侵入」音

演奏からは、たぐさんの音のメッセージが伝わってきた。冒頭の低弦のピアノシモの意味深さ。聴く者

はふつう、続く木管やホルン、そして第1ヴァイオリンに注意が向くが、低弦は、チャイコフスキーの交響曲4番や5番の運命主題のように、この曲がただならぬ何かに立ち向かい、時に脅かされながら前に進むことを印象付ける。

ラフマニノフならではの旋律美が続く中に、異様な不協和の音が侵入する。ヴァンスカはこのヴィオラの音を作曲者の指示通り、スフォルツァンドで強調する。フォルテ。それも異様に力のこもった音。第1交響曲で痛烈な批判を浴びたトラウマをひきずる不調和の感覚ともとれるが、この音符は、悪や闇の如実な存在の感覚ではないかと感じる。ロシア正教の信仰世界では、悪魔の存在が語られる。幼いラフマニノフの傍らに



は、信仰心の篤い祖母がいた。温かな言葉としぐさで、災いを退けるための祈りがひんぱんに唱えられたことだろう。このヴィオラの音の強調は、ドストエフスキーの小説さながら、ロシアの風土の中から出てきたと感じる。

だが、春のノブゴロドのように、光は勝る。聖ソフィア聖堂の白壁は、温かな陽光に輝き、聖堂の中では、ドストエフスキーも描いた「斜めの光」がアイコンに降り注ぐ。悪はこの世に存在するが、絶対的な存在ではないというのが、ラフマニノフも信じた

支え、侵攻や戦闘をむしろ肯定している現実である。

ラフマニノフの終楽章コードは、世界を賛美するかのような高揚を示す。ただ、今回の名演は、そのように響かなかったと感じられた。少しせきこむかのような、圧倒的頂点をあえて避けるような終わり方は、世界の現状を踏まえた全肯定への留保だったのかもしれない。

ウォン指揮日本フィル 戦争続く世界に奏でる調べ

2022年2月のロシアによるウクライナ侵攻直後、世界はむしろ、こんなに美しいものであるはずだというメッセージを聴く者にもたらしてくれたのは、カーチン・ウォン指揮日本フィルのマーラーの交響曲第4番だった。同年5月。希望や明るさをまっすぐ音で伝える演奏には、本当に心を動かされた。

ウクライナの戦争の終わりはなお見えず、世界に対立と破壊、むき出しの自国主義が横行する中、ウォンと日本フィルがこの6月、創立70年の節目に取り上げたのは、マーラーの交響曲第8番《千人の交響曲》だった（6月22日、サントリーホール）。当日配られたパンフレットに、ウォンは次の言葉を記している。

「《千人の交響曲》の愛称で知られ



マーラーの交響曲第8番《千人の交響曲》を演奏する
カーチン・ウォン指揮日本フィル
© Naoya Ikegami/SUNTORY HALL

るこの作品は、単なるスペクタクルではありません。巨大なオーケストラ、合唱団、独唱者たちが結集し、創造、救済、そして精神的な変容という普遍的な理念を通して、人々を結びつけようとする音楽です」

人々を結びつける——。ベートーヴェンの第九交響曲の終楽章を思わせるウォンの解釈は、第1部のテキストによって裏付けられる。「心に愛を注ぎ込んでください」「絶えざる平和を授けてください」「争いの縄目をほぐし 平和の契りを結んでく



ださい」（三ヶ尻正訳）——。聖霊Ⅱ神への祈りと、ゲーテの「ファウスト」最終場を合体させた交響曲第8番の作曲は、ラフマニノフの2番と同じ1906年だった。

日本初演は、山田和男指揮日本交響楽団（現在のN響）。1949年12月8日とその日付は記録されており、戦争直後、熱血漢の山田（後の山田一雄）が、日米開戦と同じ日に、並々ならぬ思いでこの大曲を取り上げたことが容易に想像できる。巨大化という後期ロマン派の行きつく先というより、この曲はウォンにとっても、当

正教の信仰だろう。ヴァンスカⅡ東響は、不安の闇から光への移行を丁寧に、感動的に描く。木管や弦の響きは優しく温かで、その延長に第3楽章の世界がある。

「血の日曜日」事件の翌年

この曲の作曲が着手されたのは、1906年。シヨスタコーヴィチが交響曲第11番でテーマとしたあの「血の日曜日」事件と第1革命の翌年である。ロシアがどこへ進むのか。不透明感の増す中、それでも主にボリショイ劇場の指揮者として活動していたラフマニノフは、それから10年あまりでロシア革命が起き、社会の価値と秩序が転倒し、故国から断ち切られる自身の人生を予想だにしていなかっただろう。この曲には、過ぎ去るものを惜しむような影があり、郷愁の痛みの深さがある。

フィンランド出身のヴァンスカの指揮した東響の演奏は、言うまでもなく2026年である。作曲から120年。この間に無神論を掲げる社会主義時代の旧ソ連では多くの教会が破壊され、周囲を壁で囲まれた修道院は、赤軍や特務機関に接収される動きが広がった。ソ連崩壊後、宗教世界は復興したかにみえたが、私たちが今、見ているのは、力を増した正教会の幹部が一体となって政権を

時の山田にとっても、第九交響曲のような特別な理想をはらむ曲として意識されていた。

楽団の解散・分裂の危機直後、1970年代後半や80年代に渡邊暁雄や朝比奈隆の指揮で接した当時の日本フィルに比べれば、演奏水準は今、飛躍的に高まっている。圧倒的なホルンやトランペット群が代表する強力な管弦楽は、400人弱の合唱や独唱者たちとともに、協同と調和の果てしない可能性を実感させる。

東京ではインバル指揮都響が2月にこの曲を取り上げた。寸分の隙のないその演奏が、統率者としての絶対的な指揮者の存在を際立たせたのに対し、日本フィルの演奏は違った。ウォンは、とりわけ終曲に向かう「神秘の合唱」で、演奏のすべての参加者を束ねつつ、温かな心と平和を現出させる祭司のような役を担ったと思われた。

第一部の聖霊や、「ファウスト」のテキストがうたう「栄光の聖母」「永遠に女性的なもの」が宗教的にすぎると感じられたとしても、「高みへ」という理想や善、愛への志向は、だれにも受け入れられる。視界不良の今、それでも平和を目指すということ。温かな力でそのように聴く者を励ます演奏は、ウォンの指揮する日本フィルならではのものだった。 ㊦